

横浜・川崎支部合同例会(オンライン)

2020年8月1日 スカイプにて9名参加

【1】多事総論(一人2分程度自己紹介と関心事)

- 学校はテストが終わり、高体連の仕事も始まった。授業としては、人生はじめてもった世界史 B を行っていて、帝国主義時代を扱うが、アフリカのことをちゃんと扱いたいと思っている。
- 分散登校をやり、7月から通常、期末を実施した。今日から19日まで夏休みとなった。試験は自宅でどれだけ準備ができたかなので、格差がついてしまった。夏休みは入試問題を作る時期。
- 今年度から非常勤をしている。4~6月やほかの先生が作った教材をもとに課題を受け取って返却をしていたが、7月は復習中心の授業をした。中学の授業では戦争などを扱うが、若い世代がどう授業を伝えていったらよいのか関心を持っている。
- 知り合いの遺品整理が忙しい。
- T大の教職課程センターで3日間働いている。授業はオンラインでズームを使ってやりやすい。動画やグループでセッションしたりしている。学生に不満はあるかもしれないが、授業者としては悪くないと思っている。
- 明後日から終業式。6月から分散が始まり、途中から時差通常登校。オンラインは、音声ファイルとプリント配布で進めた。進度は通常以上で、生徒は大変そうだった。それだけで授業が成立してしまったということを反省的にとらえている。GOTO トラベルと人間のいのちをどう考えるのかということは前回のスペイン風邪とパレードと重ねて捉えている。今年度は感染症を軸に授業をしていこうと考えている。

【2】実践報告の検討

Eさん「教室」からみたハンセン病問題」

①報告

学び舎のメーリス用の文章を書いて、それをもとに報告する。学び舎の教科書には「デモクラシーの波」という項目で、この写真が載っている。普通選挙のところにのっているのに意味があり、ハンセン病患者には選挙権がなかった。

写真をよりどころにして、療養所のなかに学校があったことはなぜか、考えてもらいたいと思い載せた。1970年代まで学校はある。まだ若い人たちもいるはずだが、カミングアウトはできない。なぜ外部から来た人は白衣なのかだが、権威の象徴。予防だけでなく、排除するという面もあったのだろう。授業では体験者のエピソードを入れ、そこに学びながら考えたいと思う。感染症も何人感染したかわかるが、どういう経験・思いだったのか知らない、いじめなどに繋がっていく。

冬敏之さんの経験から考える。社会復帰をして、結婚し、子どももいる。公務員として、

作家として生きた。白衣の医学生についてのエピソードを書いている。園長がこの子のように「ライオンのようになるんだ」といった。「丸太ん棒で頭を殴られた」思いをした。

当初は患者教師が、のちに派遣教師が来るようになる。派遣教師の鈴木敏子さんは「白衣は脱げなかった」という。藤本フサ子はスキンシップを大切にしていた。

社会復帰への一歩として、1950年代に高校が設置される。邑久高校分校としてできるが、消毒し、出勤していた。1期生の森元美代治さんは教師が自分たちをバイキン扱いしていたということを強く覚えている。たとえば、渡したお金を消毒していたなど。病原体として忌避すべき存在として子どもを見ていて、人間的なかわりができなかった。感染力が弱いことが分かった時期でも、そういう対応になっている。医学界の責任があるだろう。社会復帰しても、邑久高校出身としか言えなかった。

石山春平さんの、焼かれた机のエピソードも印象深い。感染しているということが分かったら机が燃やされて、小学校を退学にされた。その後、石山さんが座っていたところは、教師によって「立ち入り禁止」とされ、掃除もされなかったという。

教室から、ハンセン病の問題を考えられないだろうかと思う。授業実践では、高3に映像など見せながら授業展開し、最後に体験者に話を聞く。幼少期に感染し、子どものうちに入所することが多い。同じ世代の人たちの入所経験が教材になる。子どもの視点として、親が職員として働いていた子どもが入所者と交流する。墮胎させられた入所者との交流などを通じて語り部となる。教師は加害者として登場する。山内きみ江さんの人生から学ぶという気かをとった。旦那さんが断種させられているが、そういう経験もありながら前向きに生きている。そういう姿と学生に出会ってもらう。70歳過ぎてから、養子縁組をして、娘さんやお孫さんがいる。子どもとかかわるといふ人生をしている。ハンセン病患者としての山内さんでなく、山内さんという人から考えてもらいたいと思っている。

当事者の方からお話を伺うこと、療養所という場に行くことが大切だと思う。過去の経験を踏まえ、どう生きているのかを学びたいと思う。療養所を教室ととらえて、様々な体験をとらえていきたい。加害者であり、無理解者だった教師の存在を見つめ直す必要があると思う。教師が差別の問題に回っていることは、原発の問題、いじめの問題などにある。ハンセン病の学習から人権侵害の歴史を学ぶ必要がある。人生を通して学ぶ必要がある。コロナとの関係では、日本社会はハンセン病の問題から何を学んできたのか。感染症と罹患者を一体としてとらえる見方を問いたい。人格を否定することの問題。感染症は誰にでもなるので、差別する人もなる可能性がある。感染症の問題にいじめとか差別を持ち込んではいけない。正しく恐れることが大事とよく言われるが、その正しさはどういうものかが難しい。変化していく存在なので、歴史に学びながらとらえる、その中で病気と人間を区別することが大切。教員自身が思考停止しないで、向き合うことが大切だと思う。

## ②質疑

- 内容と方法と二つのアプローチから考える。内容とは「ハンセン病の歩みから人間の歴史

を学ぶ」ということ。前回のMさんの例会後感想で「人権とジャーナリズム」「反戦をどこで考えるか」が出されていた。1920年代のハンセン病をめぐる国際的動向と日本の医学・立法との乖離という指摘に考えさせられた。この時期から、科学と社会の問題が大衆化の中での科学的根拠を求める点で現代的な意味を持ちだした。日本では内務省社会局や衛生官僚出身者の後藤新平に代表される都市専門官僚と行政警察が科学的知見をいかして行政を行うようになった。評判の『流行性感冒』も末端まで調べ上げる仕組みがあった事例として読むことができる。また行政だけでなく、衛生組合・自警団など自治組織が動員されているところ（今は「自粛警察」）に日本の特徴がある。医学的根拠には、メカニズム派と統計学的分析派（疫学）の対立があり、日本は例外的に前者が今も優位になっていて、疫学的知見が軽視されることがあるようだ（津田敏秀『医学的根拠とは何か』）。大衆社会化の中で、包摂と排除が起こるが、強制隔離や無らい県運動といった形で排除されたのがハンセン病患者。ファシズムの中でそれは強化される（藤野豊さん）。方法とは「ハンセン病の教室から教育を考える」ということで、子どもと感染症の問題を考えざるを得ない。ハンセン病は、幼少期に罹患することが多く、隔離の中で成長していく。他方、近代教育は一斉形式の階梯制をとっていて、選別機能もある。隔離政策同様、療養所学校は戦前と戦後が連続していた。「白衣」の派遣教師のまなざしと行動は、社会事業としての教育という印象を強く受けるが、鈴木敏子の「白衣と消毒」の話は今に通じる。他方、子どものとらえ方ととらえ返しも描かれていて、子どもにとって教室は世界そのもの、そこでのつらい経験を現在からとらえ返している意味は、松本茂雄さんの戦争体験のとらえ直しと同じく、本人の中で反芻する意味を考えたい。「教室」としての療養所は、生きた足跡が見られる。「現場」としての療養所（石居人也さん）というとらえ方にも共通するが、この「日常」をハンセン病の在り方からどう考えるか、考えたい。

- 全生園に行ったことがなかった。昨年歴教協でFW参加。1日セミナーが事前にあり、参加した。全生園の写真をみて、今の自分に重なる面がある。マスク+フェイスシールドをしなければいけない。試験監督していた時生徒がマスクを途中で外していたので、するようにいった。生徒の安全の為なのか、あなたがウィルスを持っているから言っているのか、分からなくなった。ハンセン病は原因がわかっても、差別は続いた。
- 今の自分と重なるというのは、私もそう。無症状で人にうつす可能性があるのがコロナ。濃厚接触と発症した場合に、理不尽な状況に置かれないようにしないといけないし、そのように子どもには考えてもらいたい。
- 白衣とマスクの話が出たが、前回の例会の時にPCR検査を受けて陰性だった。それを受けるときに、検査する側は白衣を着てしていて、隔離されたテントで待機して、花に綿棒を入れられて、バイキンと扱われている印象を受けた。このハンセン病の「教室」を教員という目線とともに、生徒の目線でも見てしまった。1920~30年代になると、優生学の考え方が日本にも入ってくるが、民族とつながるものと、ハンセン病隔離政策はつながるのか。

• 私もマスクはしている。掃除に行くときに防護服のようなものを着ているのを見るとびっくりした。近代になると隔離するということがあるが、前近代ではどうなのか。もののけ姫のたたら精練の人々のような存在形態なのか。生きていく上での社会的な環境はどうだったろうか。

• 学校教育の中で、優生思想の考え方が入ってくる。[高木雅史が扱っている](#)。学校教育の中では能力感つながらくる。ハンセン病についても優生学的な視点で語られていることが多い。朝鮮からの強制連行の中で発症者が多い場合が多い、1950年代にらい予防法の根拠が「韓国らい」の話が前提になっている。高木さんの質問では、[厚生労働省がパンフレット](#)（ハンセン病の向こう側）を出している。前近代に関しては、日本については神社仏閣で「物乞い」「河原者」として生きていたことは聖絵などにみられる。石原慎太郎が「業病」といったが、救済の対象であるが、排除されている。



- 救済関連の教材であるのが、孝謙天皇が患者の膿を吸ったや忍性の取り組みなど。
- 数年前、歴教協で全生園を訪問したことがありました。あの時に、Eさんから色々教えていただいたことを思いおこしながら、今日のレポートを感慨深くお聞きしました。質問です。最後に出てきた山内さんのお話し聞いている高校生の表情が穏やかで笑顔もあり、雰囲気伝わります。このあとの高校生の感想や意見などが分かっていたら教えて下さい。
- この実践は、大会で報告しようとしていた。最後は山内さんとの握手会になった。手は指先はないが、料理とか一生懸命している。みんなが握手した。生徒の感想では、授業を受ける前に、母親にハンセン病の話をしたらいい顔をしなかったので、偏見がある世代があると思った。にもかかわらず母親は病気を知らず誤認をしていた。多くの国民が間違った認識を社会の側がまだしていて、社会復帰できないのではと思った。身近なところに差別があり、自分はする側でもされる側でもなるという感想があった。療養所の中で制限されてきたことを、何事も人間らしくして生きている。ただそこだけ見るのも一面的にはなる。
- 感染者と直に交わったことで、ひとりの人間と触れあったことの意味、そこに至った背景への学びの両方が大切だと言うことですね。考えさせられました。
- ハンセン病も、戦争も水俣病も過去のことになっている。同じことを繰り返してしまう。コロナの時に差別が再生産されているのは、歴史を学ぶことの大切さを感じている。教師が教室で差別を再生産していることを自覚する必要もある。『リウウを待ちながら』という漫画があるが、ペストがあった場所に生きていたというだけで差別されるという話がある。どう感染者に向き合うかということを考えさせられる。
- 当時の政府が隔離をした、教員が差別を現場で押し進めていたことの重さを感じた。戦後の水俣病も感染症を疑われ、イタイイタイ病は風土病とされた。しかし、企業による行為

という背景があった。感染症は見えないものへの恐れ、恐怖があるのだろう。自分の中に在る恐れとどう向き合うか。福島の野菜は食べられないというのもそうかもしれない。仏教的にはみな平等にという心持があるだろうが、きれいごとにはいけない。

- 世界史の授業ではハンセン病を扱ってはこなかった。ナチスの優生思想の時に障がい者のことを扱ったことはあるが。
- ハンセン病の起源は何か―現在も熱帯地方が多いのは分かっているが、どこが起源なのかは分からない。
- 単一起源らしいがまだよく分かっていない。  
メールマガジンは学び舎採択校を中心として登録した希望者に配信しています。次号の7号にEさんのこの実践を執筆していただくことが決まっています。
- 今回は一枚の教室の写真から考えてみた。今度きっちり調べてみたいと思った。目の前の状況から、同じ過ちを繰り返したくないと思っている。

### ③事後の感想

今日のEさんの報告は、1枚の写真からいろんな問いや調べるべきことなどが出てきて興味深かったです。子どもたちは1枚の(または1つの)ものを提示すると結構いろんなことを話してくれるし、よく考えるからです。(少なくとも私がともに過ごしていた小学生は)

その中で「白衣」への焦点は”広がる”なあと思いました。Fさんの「自分と重なる」とかMさんの「PCR検査での恐怖」の話も含めると、「今」とピタッと重なることがあるので、子どもたちも自分事としてとらえられるかなと思いました。

私は、山内きみ江さんと昨年お会いできたことが思い出されました。その後テレビでも見て、山内さんにメールしたらちゃんと返信してくださったのです。それも有り、また、最近見た映画『わたしは分断を許さない』の堀潤監督の同名の本のことを考えました。そこで堀さんが強調していたのは、「主語は小さいほうがいい」です。「ハンセン病の元患者」ではなく「山内きみ江さん」、「森元美代治さん」、机を焼かれた「石山春平さん」など、「主語」を小さくすると、学習者である子どもたちも教員も自分とのかかわりをもって、自分事として「ハンセン病」を考えられるからです。

このことは、学校という教育の場だけでなく、生活の場でも政治を考える上でも大事なことだと思っている最近の私です。

### 【3】今後の予定

#### 1. 次回(予定)

①時期：10月4日(日) 16~18時 オンライン例会

\*この日を中心に日曜日の夕刻で調整していきます。

②内容：「感染症と歴史教育③」を一応追及。例会の後、感染症に関して今年度したこと、

してみたいこと、考えていること、を参加者全員が持ち寄るというのも3回目なのでよいかとも思いましたが、いかがでしょうか。その他、遠隔地からのオンライン授業報告、地域教材を生かした学習指導案報告、水俣病学習、夏の大会で報告しようとしていたこと、戦後75年関係、歴史総合関係などをあげています。

## 2. 今後検討したいこと

### ①「感染症と歴史教育」：丸山さん⇒江連さん⇒

A) 感染症の歴史の授業（対象）

B) 感染症から見える教育（方法）

C) 分析視点:トピック

- ・政治：休校判断、緊急事態宣言、専門性（科学）と民主主義、人種差別、米中冷戦
- ・経済：グローバル経済、成長と生存、消費や流通の変化
- ・社会：格差（エッセンシャルワーカー）、差別（名称）、自粛、環境問題
- ・思想文化：コロナアート、恐怖と不穏（ゾンビ、怨霊）、科学

### ②「歴史総合」をめぐって

- ・歴史教育者協議会編「世界と日本を結ぶ「歴史総合」の授業」（2020年）手塚優紀子さんの帝国主義関連の文章あり
- ・『歴史地理教育』7月増刊号

### ③横浜から世界を考える

### ④「オンライン授業」をめぐって

### ⑤遠方からゲスト？